



Title	事物と心：ヒューム『人間本性論』より
Author(s)	會澤, 久仁子
Citation	メタフュシカ. 2002, 33, p. 141-153
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66668
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

事物と心

——ヒューム『人間本性論』より——

會澤久仁子

序

心の同一性とは何か。あるいは自己の観念や、人格の同一性とは何か。この問いは、ヒュームが彼の経験論において答えなければならないなかつた問いであり、彼の体系的主著『人間本性論』においては知覚を論じる第一巻の最後部分の一節で主題的に扱われる。その「人格同一性について」と題された一節では、自己ないし心の同一性とは「知覚の束」すなわち関連しあう知覚の集積であると述べられる。しかしこの節だけで自己や心とは何かが明確であるとは言えない。なぜなら、そのような心において「外的」事物がどのように想定されて「内的」なものと区別されるのかや、続く第二巻と第三巻で自他の感情や道徳を論じる際の自己の觀念とは何かについて

も包括的に理解される必要があるからだ。最初に挙げた問に包括的に答えることは、『人間本性論』を統一的に読解し、ヒュームの哲学を理解するうえで重要である。とりわけ、「知覚の束」としての自己の観念と第二巻・第三巻における自己の観念との整合性については、ヒュームの説明は不十分であり、ヒューム解釈において常に問題となつてゐる。

本稿では、そのような自己や心の包括的な理解にむけた作業の一部として、第一巻における外的事物の同一性の想定に関するヒュームの考察を検討し、それを通じて心の同一性の意味を幾らか明確にしたい。

以下、第一章では、ヒュームが「心」という言葉を二つの意味で用いて『人間本性論』を書き始めていることと、ヒュームにおいて外的事物は心に現れる知覚に他ならないことを確定する。第二章では、その外的事物の知覚が「外的」と想定

される仕方にについてヒュームの説明を確かめ、心の外的 world と内的世界の意味を明らかにする。そして第三章で、心の同一性と外的世界、内的世界との関係を整理する。事物世界は心が心の外に想定するものであるが、その意味でも外的事物は心の同一性を構成する一部であり、「心」が明らかになるだ。

第一章 心と、外的事物の知覚

1. 『人間本性論』第一巻第一編における「心」の意味

ヒュームは「心」(mind) および「知覚」(impression) のふたつに用いて、何を意味させているのか。まず『人間本性論』の冒頭、第一

卷第一部においてそれを確認してみよう。ハーバード大学では、ヒュームは「心」(mind) 知覚の出現するといふ、知覚を産み関係させる機能との二つの意味を同時に持たせて用いていることである。

『人間本性論』第一巻第一部第一節は、次のようじ始まる。

「人間の心の一切の知覚は、帰属するところの別個な種類となり、私はそれを『印象』(impression) および『觀念』(idea) と呼ぶ。」(T.1.1.1; SBN 1) 「精神」(soul) が初めて出現 (appearance) した感覚や感情、情動の「心」(ibid.) をコトバ一

ムは印象と呼ぶ。なおハーバード「精神」は「心」の同義に用いられてくる。そして、「ある印象が心に現れる(present with the mind)」。それは観念として再びやがて現れる。我々は経験によって見出す。」(T.1.1.3.1; SBN 8) ジのやがて、知覚すなわち印象や観念が「心に出現する」(T.1.1.18; SBN 5, T.1.1.3.2; SBN 9)、「心に現れる」(T.1.1.7.7; SBN 20) との表現は他にも繰り返しなわれる。また、快苦の觀念が「精神上に戻る(return on the soul)」(T.1.1.2.1; SBN 8) や、「過去のある出来事の觀念が「心になだれ込む(flows in on the mind)」(T.1.1.2.1; SBN 9) との表現もある。

「心」(mind)、「心」を知覚の出現するふたつあるのは、後に人格同一性を論じる際の劇場の比喩と重なる。ヒュームは次のようじ述べてゐる。

心は一種の劇場であつ、そひどはこゝかの知覚が継起的に出現する。それらは通り過ぎ、舞ふ戻り、滑り去り、混ざり、無限の多様な状態および状況になる。(T.1.4.6.4; SBN 253)

ただこのように注意すべしは、続く次の文である。

劇場との比較を我々は誤解してはならない。心を構成するの

は、継起する知覚のみであつて、これらの場面が上演される場所の念ないし場所を構成する物質の念はどんなにかすかにもないものである。(ibid.)

ヒュームにおいて、心とは知覚の現れるものであるが、一定の場所を指すわけではない。知覚が継起して現れるといふが心と呼ばれるのだ。

ヒュームはまた、第一巻第一部において、心を次のようにも描写する。感覚的印象は未知の原因から精神に起源的に起り、「いの印象は心によつてコピーわれ」(T 1.1.2.1; SBN 8)、このコピーは観念と呼ばれる。そして、印象が観念として再び心に現れる仕方には二通りあり、「記憶」(memory)と「想像」(imagination)の二つの機能(faculty)による。記憶によって、印象の最初の活気を保つて観念は出現する。また記憶は、原印象と同じ順序と形式に束縛されて、観念の順序と位置を保存する。他方、想像によつて、印象の最初の活気を全く失つて観念は出現する。想像においては知覚は淡く、萎えていて、「心によつて相当長く不動かつ一様に保たれるのは困難」(T 1.1.2.1; SBN 9)である。想像は原印象と同じ順序と形式には拘束されず、自由に観念を置き換える。ただし、観念間の連合性質ないし結合原理が、想像機能の作用をある程度齊一的にしてゐる。「の連合を生み、心が一つの

観念から別の観念へと伝へられる性質は二つあり、すなわち、類似と、時間及び場所の接近、原因と結果である。(T 1.1.4.1; SBN 11) 他にも、「心は二つの観念を接合する」(T 1.1.4.1; SBN 10)とか、「心が個別観念を産む」(T 1.1.7.8; SBN 21)といった表現がある。ヒュームは、観念を産み、結びつけ、「心の機能」(T 1.1.7.8; SBN 21)なし「心の働き(act of the mind)」(T 1.1.7.11; SBN 22)あれば認めている。⁽²⁾

一、二 外的事物の知覚

次に外的事物(external object)について、ヒュームは、外的事物の存在を認めるが、外的事物は知覚として存在すると考へる。したがつて「心から、心のよつて外的事物を想定するか」というヒュームの問いが出てくる。それをヒュームは次のように説明している。

外的事物の想定について論じる一節、「感覚に関する懷疑論について」の冒頭で、ヒュームはまず、「懷疑家は、物体(body)の存在に関する原理の真正さを何らかの哲学的証明によつて主唱すると称する」とができないにもかかわらず、その原理に同意しなければならない」(T 1.4.2.1; SBN 187)と述べ、さらに「物体は有るか無いかと尋ねる」とは無駄である。それは、我々の行う一切の論究において当然としなければならぬ点である」(ibid.)と述べる。このように、ヒューム

ムは物体がある」とを認める。ただしヒュームにおいてその物体は知覚に他ならない。

「存在の観念と外的存在的観念とに」(ibid.)¹一節で、ヒュームは、「我々が意識し記憶する、いかなる種類の印象も観念も、存在すると想われる」(T 1.2.6.2; SBN 66)といい、「存在の観念は、存在すると想われるものの観念」(ibid.)と同じである」(T 1.2.6.4; SBN 66)と指摘する。すなわち、心に現れる一切の事物は存在し、それは知覚に他ならない。ヒュームは、外的事物についても、それは知覚によつて知られるようになるだけだと述べて、「外的存在的観念」を語る。

我々の注意を可能なだけ自己の外にとどめてみよう。想像を天涯に、宇宙の果てに追おへ。しかも我々は、我々を越えて一步も真に踏み出すことはないし、その狭い範囲に現れた知覚以外にどんな種類の存在も想うことはできない。これが想像の宇宙であり、そこに産み出される観念以外のどんな観念も我々は持たない。(T 1.2.6.8; SBN 67-8)

ヒュームによる「我々が何を想おうともそれは知覚以外の存在ではない。つまり心の外はない。では一体、「自己の外」とか「外的」事物とは、どういふことだらうか。何の外なのだらうか。⁽³⁾」(ibid.)、ヒュームは、外的事物の知覚とはどのよ

うなものか、あるいは、いかにして外的事物が想定されるかについて探求を始める。そして、外的事物の想定の仕方がわかれれば、「内的」なものとの想定の仕方も見えてくるだらう。

第十一章 外的事物の想定

外的事物の知覚について、ヒュームは、次のような二つの関連する問いを区別して立てる。

物体が感官(senses)に現れていないときも、物体に『連續的』存在を帰属する理由は何か、および、物体を心や知覚から『別個に』存在すると想定する理由は何か(T 1.4.2.2; SBN 188)

物体は感官に現れていないときも連続してあると想定され、また心や知覚から別個にあると想定される。後者についてヒュームは、「物体の位置と関係、言い換えると、物体の外的位置ならびに物体の存在と作用との独立」(ibid.)と説明を加えている。そしてヒュームは、「連續的存在的別個な存在の考えを産むのは感官と理知(reason)と想像のいずれであるか」(ibid.)を考察する。本章ではこの考察を追おへ。

II. I 感官や理知は外的 existence を伝えない

感官機能は、連續的存在の信念を生まない。なぜなら、事物がもはや感官に出現しなくなつた後に、事物の連續的存在の念を起すことはできないからである。また感官は、別個な存在の信念も生まない。なぜなら感官は一つの印象を伝えるだけであつて、背後の外的で独立なもの的心象(image)を伝えるのではないし、また感官は印象を外的で独立な存在そのものとして現すこともないからである。

もし感官が印象を別個な存在そのものとして伝えるならば、それは一種の錯覚だとヒュームは述べる。感覚の本性に關しては、「あらゆる感覚は心によつて真にあるがままに感じられる」(T 14.25; SBN 189)。そして感覚の位置と關係に関しては、「われ」感官が印象を我々自身より外的で独立なものとして現すならば、事物と我々自身の両方が感官に分離でなければならない」(ibid.)とする。ヒュームは、我々自身が感官の対象であるかについて、人格同一性に関する問題は感官のみによつて決定することは到底できないとし、まだ「日常生活においては、自己や人格の觀念が全く確定されたり限定されている」とは、明らかに決してなし」(T 14.26; SBN 189-190)と述べる。⁽⁴⁾それゆえ感官は我々自身と外的事物とを區別できない。結局、「内外のあらゆる印象は……起源的に同等」(T 14.27; SBN 190)や、「心に入る一切の物は現実に

(in reality) 知覚である」(ibid.)。したがつて我々自身に別個な知覚の想定は、感覚からではなく、他の原因から生じるだろう。

ヒュームは、外的な知覚の想定について、身体の外にあると見える印象を我々自身の外にあるとする主張に対し、次の三つを指摘する。すなわち、第一に我々が四肢体躯を注視するとき知覚するのは特定の感官印象であり、それに物体的存を帰す心の働きに説明が要ること、第二に音・味・匂は普通心によつて連續的独立性質と見なされるが、感官には身体外に位置するものとしては現れないこと、第三に視覚は推理と経験なしには距離を知らせないことである。また、知覚の独立性についても、それは感官の対象である」などと、やはり経験を必要とする。

では、理知は、物体の連續的で別個な存在を教えるだらうか。ヒュームは、感官印象を三種類に分けて、それらについて哲学者と庶民との想定の違いを指摘する。三種類の印象とは、(1) 物体の形状、かさ、運動、固さの印象、(2) 色、味、匂、音、熱、寒さの印象、(3) 快と苦である。哲学者も庶民も(1)の種類が連續的で別個な存在を有すると想定し、庶民のみ(2)の種類も同等と見なす。そして哲学者も庶民も(3)の種類を單なる知覚と評価する。さて、もちろん感官にとつては全ての知覚の存在様式は同じである。また

庶民は、哲学者による表象説ないし二重存在説を知らずに、またこの説に反して、或る印象を事物と混同して、その印象そのものに別個な連続的存在を帰属させる。庶民のこの感想は全く非理知的なので、理知以外の機能から生じなければならぬ。さらに、知覚と外的事物とを同一とするにせよ、区別するにせよ、外的事物の存在を因果的に証明することができない。だから理知は、物体の連続的で別個な存在を確信させることができない。したがつて物体の連続的で別個な存在の考えは、全く想像に負わねばならない。

II. II 想像による外的事物の想定

「一切の印象は内的で消滅する存在である」(T 1.4.2.15; SBN 194)。だから、或る印象の連続的で別個な存在の念は、その印象に特異な諸性質と想像の諸性質との協働から起らなければならない。ヒュームは、連續で別個な存在を帰される印象と、内的で消滅すると見なされる印象とを比較して、そのような特異性質を探す。

連續的存在を帰される事物にヒュームが見出すのは、恒常性(constancy)および整合性(coherence)である。例えば、今日の前にある山々や家々、木々、グッズ、テーブル、本、紙は、見るのを中断しても、変化しない。また、物体は度々その位置や性質を変えるが、その変化において整合性を保つ

ている。例えば、一時間部屋を空けると、暖炉の火の状況は変わっている。しかしそのような変化は他の例で見慣れている。この整合性も、恒常性と同様、外的事物の特徴である。

(I) 知覚の整合性に基く連続的存在の想定

では、整合性と恒常性とは、どのような仕方で、物体の連續的存在を考えを起こすのか。まず整合性について、ヒュームは、はかない消滅すると見なされる内的印象も整合性なし規則性を持つが、それは物体に見られるものは違うと指摘する。例えば諸感情は相互に依存し結合しているが、これを保つために諸感情が知覚されないときも存在し作用すると思定する必要はない。それと異なって、外的事物は連續的存在を必要とし、これを欠くと作用の規則性を著しく失う。

例えば、部屋で座っていて、突然ドアの開く音を聞き、少し後に配達人がこちらにやってくるのを見る。これを考えてみると、第一に、この音がドアの動き以外から発するのを決して観察したことはない。それゆえ、部屋の反対側にあると記憶するドアが依然としてあるのでなければ、今の現象はあらゆる過去の経験に矛盾する。また、人体には重力があり、空中に上らないのを常に見ているが、記憶する階段は私がいなくても消滅せずにあるのでなければ、配達人は部屋に到着するため空中を登らなければならなかつた。さらに、受け

取った手紙は、遠隔地に住む友人からだとわかる。私は記憶と観察に従つて心の中で友人との間に水陸を拡げ、郵便や船の効果と連続的存在を想定するのでなければ、この現象を他の例における経験と一致するように説明できない。

「」のような現象の想定は、因果結合の原則に反対していると見なされるかもしれない。つまり、私はドアの音を聞くと同時にドアの動きを見ることには慣れているが、「」の事例では片方の知覚しか受けなかつた。だが、ドアが依然としてあり、私が知覚しなくても開いたと想定しなければ、この観察は従来の観察に反する。そこで「」の想定は、最初は全く恣意的で仮定的だが、矛盾を調停できる唯一の想定である」とによつて、勢いと確証とを得る。」(T 1.4.220; SBN 197)

これに類似の例はほとんど常に現れる。そして私は事物の連續的存在を想定して、事物の過去と現在の出現を結びつけ、事物の性質と状況の経験に適合するよう事物を結合する。

したがつて「」に私は、世界を実在し持続する或るものと見えない、私の知覚にもはや現れていないときもれば、その存在を保つと見なすように自然になる。(T 1.4.220; SBN 197)

「」として、心に現れる知覚を越えて、事物からなる世界の連續的存在は想定される。

出現の整合性に基く「」の推断は、過去の経験によって規制されるが、因果推論とは異なる。なぜなら、因果推論は、知覚の規則的継起の習慣(custom)から起こり、知覚の規則性を越えない。他方、事物の連續的存在の推断は、知覚の規則性を越えて、知覚されない事物のより大きな程度の規則性を与えるからである。したがつて、習慣と推理とを知覚以上に及ぼすのは、単なる習慣の結果であることはできず、想像との協同によつて起こる。

感官に出現する事物は一定の整合性を有するが、想像は「」の整合性をさらに大きく「」的にするよう働き、事物の連續的存在を想定する。

心は、ひとたび事物の「」性を観察する道筋にあると、「」の「」性を可能な限り完全にするまで自然に続く。このためには単純に事物の連續的存在を想定すれば十分であり、「」の想定は、感官以上を見ないときの事物の規則性より遙かに大きな事物間の規則性の念を与える。(T 1.4.222; SBN 198)

(二) 知覚の恒常性に基く連續的存在の想定

外的事物の連續的存在を満足に説明するためには、外的事物の出現の整合性に、さらに恒常性を加えなければならない

ヒュームは述べる。知覚の恒常性に基く物体の連続的存在的想定について、まず体系の概略を示すとこうだ。例えば太陽や大洋の知覚のように、或る知覚が中断しても恒常的と観察されるとき、その中断された知覚は、異なるものとは見なされず、一個の同一物と見なされがちである。しかし、知覚の中斷は完全な同一性とは反対なので、我々は一種の矛盾に巻き込まれる。「この困難を脱するために、中断された知覚が我々の感じる」とのできない眞の存在によって結合されないと想定する」とによつて、中断ができる限り覆い隠すが、むしろ全く除去する。(T 1.4.224; SBN 199) そしてこの想定は、中断された知覚の記憶と、それらの知覚を同一と想定する向癖(propensity)とか、勢いと活氣を獲る。

この体系の正当化のために、次の四つが必須である。(1) 同一性の原理を説明すること。(2) 中断する知覚の類似に基いてそれらの知覚に同一性を帰属させる理由を与えること。(3) 中絶した出現を連續的存在によつて接合する向癖を説明すること。(4) ハの心の向癖から起つる想念の勢いと活氣を説明すること。

(1) 同一性の原理について、ヒュームはハの説明する。「事物はそれ自身と同一である」という同一性の命題において「事物」の觀念は「それ自身」の觀念と何らかの區別がなされねばならず、ただ一個の事物を見るだけではこの區別はな

されない。一個の事物に時間の觀念を当てはめ、ハの当てはめられた時間変動を通じて無変動で無中断の事物を見るとき、その事物は同一性の觀念を与える。なお、時間の觀念とは本来は知覚の継起であるから、不变な事物に時間觀念を当てはめるのは想像のフィクションによる。

(2) 中断する類似の知覚に同一性を帰すことについて、ヒュームはまず、ここで説明するのは物体の存在に関する庶民の信念であると注意する。人類の大半は、哲学者とは違つて、目や耳によつて入つてくる感覚そのものを事物と見なし、事物と知覚を区別しない。さて、想像において觀念を連合し、想像を一方から他方へと軽易に移す、觀念間の関係は、觀念相互を混同させやすい。とりわけ類似關係は、觀念連合だけでなく、心の性向(disposition)の連合をもひき起こす。ヒュームは、心を同一または相似の性向に置く觀念はとても混同されやすいことを一般原則として立てる。そして、同一事物を見るとときの性向を検討し、それと同じ性向に心を置いて同一事物と混同される事物を探す。同一事物を見る時と同じく、觀念から他の觀念への想像の無中断な移行を起こすのは、関係する事物である。それゆえ関係する事物の継起には同一性が帰属される。経験上、ほとんど全ての感官印象には中断に拘らず恒常性がある。例えば部屋の調度の知覚は、目を一度閉じて開ける前後で完全に類似する。この類似は、心の性向

を同一事物を見る時と同じにして、中断する知覚を同一と考えさせる。

(3) ヒュームのように考える人々は、感官知覚そのものを物体と考えるので、中断された知覚そのものに同一性を帰する。しかし、出現の中断は同一性に反対であり、心はヒュームの矛盾に困惑して、困惑からの救いを自然に探す。二つの反対原理の対立のうち、同一性の念は思惟の円滑な移行から起るので、これを放棄するのは不承不承しかできない。それゆえ、知覚の出現の中断について、知覚はもはや中断されず、無変動と並んで連続的な存在を保ち、それによって全く同じであると想定しなければならない。

しかし、知覚の出現の中断は長く頻繁で看過でもない。また、知覚の出現と存在は一見全く同じに見えるので、知覚の出現が中断しても存在は続くと想定できるか疑われるだろう。ヒュームは、心が知覚の連続的存在を推断するのは事実として、ヒュームの推断が作られる様式と推断の由来する原理とに言及する。確かに、ほとんど全ての人類は、知覚を事物すなわち真の物体と想定し、またヒュームの知覚ないし事物そのものが我々のいるいないに拘らず連続して存在すると想定する。我々は、我々がいなこととも知覚ないし事物はやはり存在するが我々はそれを感じず見ないと言う。ヒュームは二つの疑問を挙げて、それらに答える。「第一に、いかにし

て我々は、知覚が消滅せずに心からいなくなると想定する」と満足であるか。(T 1.4.2.38; SBN 207) 「第一に、ヒュームによるとして我々は、知覚ないし心象を新しく創造する」となしに、事物が心に現れるようになると想つか。そしてヒュームの見る「心」と感じる「心」と、知覚する「心」において我々は何を意味するか。(ibid.) 第一の疑問について、ヒュームはまず次のように心を説明する。

我々が心と呼ぶものは、一定の諸関係によって結合され、完全な単純性と同一性とを与えていたと誤つてではあるが想定される、種々の知覚の堆積ないし集合に他ならない。(T 1.4.2.39; SBN 207)

そのうえで、知覚は互いに区別することができる、分離して存在すると考えられるので、

或る特定の知覚を心から分離するには何の不合理もない。すなわち、思考者を構成する、諸知覚のその連結された塊と一切の関係を絶つには何の不合理もない。(ibid.)

第二の疑問についても同様に、知覚と同じものを表す事物

は、心との連接が可能である。「外的事物は、見られ、感じられ、心に現れる。すなわち、外的事物は、知覚の連結された堆積に対して関係を獲て、それらの知覚に非常に著しい影響を及ぼす」(T 1.4.2.40; SBN 207)。「それゆえ、同じ連續的で無中断の『存在物』(being)が、ともに心に現れ、ともに心から消え、存在物それ自身には何の真のないし本質的な変化もなくてよい。」(ibid.) 事物ないし知覚の連續存在の想定は矛盾を含まず、我々はこの想定に傾くままでよい。類似の知覚に同一性を帰すとき、我々は知覚の連續的存在を偽造して、知覚の中断を除去してよい。

(4) 最後に、我々は連續的存在を偽造するだけではなく信じるので、そのような信念はどこから起つるか。ヒュームによると、信念とは活気ある観念に他ならず、信念はこの活気を関係する印象から獲る。関係は、印象から観念へのスムーズな移行を起こし、さらにこの移行の向癖をも与え、印象の活気を関係観念に伝える。しかし今の場合には、移行の向癖は他の原理から起つる。記憶された諸知覚の類似は、中断した知覚を同一物と考える偏癖を与え、さらに中断した知覚を連續存在によつて連結する偏癖を与える。以上の事物の連續存在を偽造する向癖がある。この向癖は、或る生氣ある記憶印象から起つて、連續的存在のフィクションに活気を与え、物体の連續的存在を信じさせる。⁽⁵⁾

事物ないし知覚に連續的存在を帰すことの説明は以上である。そして、連續的存在の意見から、別個な存在の意見は引き出される。

やいにヒュームは、哲学者による一重存在説の起源も次のように説明する。すなわち、以上のように知覚の連續的、独立的存在を想定しても、少し経験を振り返ればすぐに、知覚は独立的ではなく、連續的でもないとわかる。それゆえ哲学者は、知覚と事物とを区別して、知覚は感官に依存的で、中断し、心に戻る⁽⁶⁾ことに異なるものと想定し、事物は連續的で同一性を保つものと想定する。この説は、理知にとつても想像にとつても、最初から気に入るものではない。というのも理知にとつては知覚が唯一の存在であり、知覚からそれ以外の事物の存在を因果推論できないし、また想像にとつては知覚が事物であり連續的に存在すると信じるのが自然だからだ。二重存在説が起つるのは、想像が知覚の連續的存在を想定し、これに反して理知が知覚の依存と中断に気付き、それで知覚の中断を許容して理知を喜ばせ、他方で同時に知覚以外のいわゆる事物に連續的存在を帰属して想像に快適にする。さらにこの哲学的体系は世俗の体系と似ており、哲学者は書斎を去ると容易に世俗の自然な考えに戻る。ヒュームは

「重存在説を、理知と想像の両原理による「奇怪な產物」(monstorous offspring) (T 1.4.2.52; SBN 215)、「一時逃れの救済策」(palliative remedy) (T 1.4.2.46; SBN 211) と類似な」と述べてゐる。

「ハコヒ外的存在的に關する通俗的体系と哲學的体系とを吟味するは、理知や想像に対する懷疑が起り、ひがむをえない。しかし我々は、軽率と不注意によつて懷疑から救われる。「読者の意見が現時既にあれば、一時間後には内外両世界があると納得する」(T 1.4.2.57; SBN 218)。ハコヒの内外両世界とは、通俗的体系における外的事物の世界とそれ以外の⁽⁶⁾内的なものとの世界とである。

外的事物の想定の説明から分かるのは、或る整合的または恒常的な諸知覚に想像が同一性と連續性を帰し、それらの知覚を心から分離したり、再び心と連接でゆると想定する」とである。すなわち心が心の外を、連續的な事物世界を想定するハコヒである。その際、心とは、関係しあう種々の知覚の堆積に他ならない。そして、連續的な外的事物ないし知覚に対して、感情のよべに消滅する知覚は内的と見なされる。⁽⁷⁾最後に心の同一性とは何かを改めて確認し、やがてハコヒと外的世界および内的世界との関係を整理する」と述べよう。

第三章 心の回一性と内外世界

ヒュームは、第一巻第四部第六節「人格同一性について」において、自己観念について、「人類は、思ふよりぬ速くで繼起し、絶え間なく流轉と動きのうちにある様々な知覚の束なし集合に他ならぬ」(T 1.4.6.4; SBN 252)と述べる。これは、先に触れた心の定義⁽⁸⁾や劇場の比喩⁽⁹⁾と同じである。そのへで、自己なし心の同一性と單純化を想定する偏癖を説明する。その際ヒュームは、人格同一性を、「我々の思惟や想像に関する人格同一性」(T 1.4.6.5; SBN 253)と、「我々の感情や我々自身のうちに抱く関心に関する人格同一性」(ibid.)とに區別し、前者をこの節の主題とする。自我なしし人格の同一性の想定は、先に事物の同一性を想定したのと同じく、繼起し関係しあう知覚を考えるときの想像のスムーズな移行によつて起つる。ヒュームは、心の同一性を想定せざる因果関係について述べ、「人間の心についての眞の觀念とは、心を、原因結果の関係によつて結ばれ、互いに産み、壊し、影響し、変容させる、様々な知覚なし様々な存在の体系と考える」とだゝ我々は述べるだひへ」(T 1.4.6.19; SBN 261)と述べる。やがてヒュームは、人間の心についてか、動植物についてと同様、関係しあう諸部分に同一性を帰すの

みならず、これに似た心の働きによって、諸部分を結合する或る単純なものをも想像すると付け加えている。

そのように継起し関係しあう様々な知覚に心の同一性が帰されるとすれば、感情のような「内的」知覚だけではなく、

外的事物を構成する知覚も含めて、心の同一性は想定されることになる。ただし心は、一部の知覚ないし事物に同一性と

連続的存在を帰して、心から分離して、外的事物世界を想定する。それでも、その外的世界の連続的存在の信念は、心が抱くのであり、心の同一性の一部を構成し、それどころか重要な一部分であると言えるだろう。というのも、もし諸知覚にそのように同一性を帰すことができなかつたら、諸知覚の規則性に頼つて「自己」の同一性を想定する」とは難しくなるだろうからである。しかし「自己」の同一性についてヒュームは結局、「関係や推移の容易さが同一性の名に相当する資格を獲得する時や失う時に關する何らかの議論を解決できる正しい基準はない」(T.1.4.6.20; SBN 262)といふ結論しており、継起する知覚の全てが心の同一性を構成するのではなく、またそれが心の同一性を構成するかを明確に定めるいふべきなごりとも真である。また、心と分離されたり連接されたりする外的事物に対して、感情のように連続的とは想定されない知覚と心の原理なし働きとは、外的世界を構成する。感情や心の働きは規則性を持つており、これらに「我々の感情

や我々自身のうちに抱く感心に關する人格同一性」が帰されると考えてよいだろ。ヒュームによるといの人格同一性は、先の想像に關する人格同一性を補強するのに役立つ(ibid.)。

結語

以上の外的事物と心についての探求より、心の同一性と外的世界、内的世界について次の二点を結論できる。第一に、想像に關する心の同一性が内的な知覚（や心の働き）と外的事物との両方によって構成される」と、第二に、事物世界が心によって心の外に想定される」と、第三に、内的な知覚（や心の働き）のみに同一性を帰す」とがやむむじふである。

注

(1) 「人間本性論」の参照は次の版を用い、略記号Tと巻、部、節の段落番号によって示し、² Selby-Bigge-Nidditch版のページ数を付す。引用訳の際、原文の大文字で始まる單語や大文字で示される單語は『』で、イタリック体は傍線で表した。また〔〕は筆者による補足を示す。

Hume, David, 2000. *A Treatise of Human Nature*, David Fate Norton and Mary Norton (ed.), Oxford: Oxford University Press.
_____, 1978. —, L. A. Selby-Bigge (ed.), second edition revised by P. H. Nidditch, Oxford: Clarendon Press.

あた邦訳は次を参考にした。トマス・ヒューム、大槻春彦

訳『人性論』全四巻、岩波文庫、一九四八—一九五一年。

(2) いのよみうな記憶や連合の活動は心の同一性を既に前提してゐる
と指摘されるかと思ひれども(Biro 47 and note 6)。だがシローが
指摘する所によると、ヒュームは「心」があらわすことを認める
それがふるむよべぬのかを證じて、ふくらむ況りといふだぞ。

Biro, John, 1993. "Hume's new science of the mind". *The Cambridge Companion to Hume*. David Fate Norton ed., Cambridge: Cambridge University Press.

(3) 第一巻第一部分によくて註する「心の印象にやぶる物体の印象にやぶる」(T 1.1.18; SBN 5) は、心と物体を区別する表現は見られない。

(4) 日常生活において自己の観念が確定されていないといひて述べ
られるいふは、自己の観念が常に親しく現れていたり第一巻で
述べられるいふ異なつておらず、意味を同じく。

(5) 記憶観念は、生氣に富み、印象と同等の働きをするいふは、「記憶印象」(impression of memory) や、「現在観念」(present idea) と表現されるいふがある(T 1.3.41; SBN 82-3, T 1.3.8.15; SBN 106)。

(6) 「重存在説」を取る所には「外的事物」と「内的知覚」とが区
別され、通俗的体系における内外の区別とは異なる。

(7) わいに、内的なものに心の働きを含めてよいかもしれない。
ヒュームは、中断する知覚に連續的存在を帰す心の向癖を説明
する際に次のように述べてゐる。

経験上何よりも確実ないことに、情感や感情に矛盾するいふなも
のを、外部から生じようとも内部から生じようとも、つまり外的事
物の対立から生じようとも内的一原理の闘争から生じようとも、目立つ
た不安を与える。反対に、自然な向癖と符合するものは何でも、
外的に向癖の満足を助長するものであれ、内的に向癖の動きを
一致するものであれ、目立つた快を確実に与える。(T 1.4.2.37;
SBN 205-6)

いりでは外部と内部、外的と内的い呼ばれることは、外的事物
と内的一原理と言ひ換えられてくる。そして内的一原理とは心の向
癖などの働きを指していると考へる」とがである。ただし
ヒュームは、「その「事物ないし知覚の」活動なし運動は、あ
る見地で考えれば事物そのものに他ならぬ」(T 1.1.44; SBN
12) へ述べており、結局は、心の働きは諸知覚の見方を変えた
のである。ヒュームは第一巻で自己に心の働きを含めてお
り、この論点は第一巻における自己の解釈に關係する。

(8) 111 (11) (3)
(9) 111 (11) (3)

(あふれおへり) 臨床哲学・博士後期課程)